

書 評

『がんの今を知る』

—最新情報で学ぶがん医療と保険の新常識—

佐々木 光信 (保険医学総合研究所 取締役兼代表 医師・医学博士) 著



「がん」というと何を思い浮かべるだろうか？ 1981年以来、日本人の死因の第1位であり、4人に1人ががんで亡くなるという致命的な

疾患であるとともに、生涯で2人に1人がかかるというごく当たり前の病気でもあるので、身内や知り合いにもがんで亡くなるという致命的な

募集人必読、最新医療と公的保険取扱いを網羅

[評者] 白水 知仁 (ミュンヘン再保険メディカル・コンサルタント、元日本保険医学学会会長)

多いと思われるが、2021年の生命保険文化センターの調査では、民間がん保険への世帯加入率は66・7%に及んでお

り、民間生命保険の中でも大きなマーケットを構成している。しかし、がんというも

じられないほどの量の情報であふれているが、何が重要な情報であるのかわからないだけでなく、信頼性、信憑性に欠ける

今を知る』は、がんに関する造詣が深く、医師として保険会社の要職を務めた著者が著した書籍であり、がんに関する基本的知識にとどまらず、治療については標準治療をはじめとする基本的治療からゲノム医療に代表さ

情報も数多く含まれている。まさに玉石混交の情報的大海の中に投げ出され、むしろ不安を募らせかかない状態となっている。まずはがんに関する正しい基礎知識を身に付けた上で情報収集しなければならぬのであるが、それを1冊でカバーするような書籍がほとんどないのが実情である。今回紹介する『がんの

る最先端のがん医療までを体系的にまとめ、その先の将来についてまで述べている。もちろん、最先端の治療を含めたがん治療の公的保険における取り扱いや自己負担の詳細にまで触れており、不安の大海を乗り切るためのまさに絶好の海図、そして羅針盤となる書である。

本書はコンパクトながら取り扱う範囲は幅広く、がんの種類、進行度、予後の違いなどの基礎知識から、標準治療とその位置付け、セカンドオピニオンのあり方やがん治療における医療機能分化、がん患者の就労問題や傷病手当金、分子標的薬などの高額薬剤の出現と薬価算定基準ならびに医療経済学との関連、新薬の保険収載に至るま

での、公的保険における取り扱いならびに自己負担、がん検診とその効果および課題など、さまざまながんに関する先端医療の紹介、特にゲノム医療については遺伝子パネル検査の結果、どのように抗がん剤が選択されるのかも示されている。また、がん診療の将来については、創薬技術やAIの活用だけでなく、各種がん関連学会が取り上げているさまざまな技術やそれを融合した治療にまで触れている。そして、これらのがんの最新情報を踏まえた上で、民間保険会社での経験も生かして民間がん保険を区分し、どう公的保険で不足する保障を補完するのか、将来に向けてどのような商品が望まれるのかにまで触れている。

がんについて取り扱った著書は世の中にあまた存在するが、がんの基礎から現時点での最新医療、そしてその将来まで幅広く解説するだけでなく、募集人としてがん保障をすすめるに当たってがん治療の未来像を語るだけの知識を身に付けることは極めて重要であり、そのため欠かせない良書といえる書籍である。私自身、あらためてがんに関する知識をバージョンアップして再整理できたのも本書のおかげだと心から感謝している。

がん保険への加入を検討中の方、そしてがん保険を勧誘する募集人の方にとって必読の書として是非おすすめしたい書籍である。
(A5判/282頁、保険毎日新聞社、2022年10月10日発行、税込3300円)